



ピタインダカン

(おさみがりにばし)

第 50 号

発行日 2025 年 1 月 8 日

発行人 矢代 しー

秋田市御野塩 7-1-29-305

光

夢想窓を開けると

細長い連子を通りぬけた

ミルク色の光が

まっすぐ部屋に射し込んでくる

光の縦縞は

星をちりばめた滑らかな帯のよう

薄暗い部屋の天井近くで

ゆるりと曲線を描き宙に舞う

心を和ませる

光の香しい匂いが

身体にやさしく沁みてくる

やがて板の間にも

宙につづく道が

太い金糸の輝きで延びてきた

庭

二十二年

働き盛りの五十代

なんの前触れもなく

人生が急転直下

非難囂囂 罵詈譏謗
証拠隠滅 虚虚実実

氣息奄奄
波状攻撃

陰陰滅滅
満身創痍

突き刺さる刺

輪郭のない明日

光の見えない闇

底知れぬ闘いは

苦しみを増殖させ

暮らしに暗い翳を落とした

あの日から

わたしはことばの庭を持った
つつましい

わたしだけの庭

そこでは

飾ることも

繕うことも

偽りもない

ことばの花が咲いている

花の声に耳を傾けると

ひそやかに

ことばが開かれて

あたりに芳香がただよう

わたしは

そっと花を聞く

あかるい陽光は

わたしを優しくつつみ

こころの海は風ぐ

庭を荒らすもの

花を踏みつけるものは

去れ！

わたしは

あたらしい

わたしを生きてゆく



横莊っこ

高校は

横手と老方間おいかたを走る

横莊線おうしょうせんでの通学だった

車両も古くて小さかったので
「横莊っこ」と呼ばれていた

浅舞駅から乗車

早朝の発車には泣かされた
特に冬場は長靴跡が頼りだった

横莊っこは

地主たちの「我田引鉄」で
いびつな路線になったが

ガタン ゴトン ガッタン

懐かしの軋み音は

青春を運んだ

（横莊っこ一番の美人は？）

男子生徒の青やかな声

選ばれたのは

小顔のスポーティな別嬪さんべっぴん

横手駅の5番線に到着

低く短いホームも

その時だけは若やいだ

昭和四十六年に

横手盆地を走った

横莊線は廃止となったが

時折

横莊っこが

ゴトン ガタン ゴットン

幻影の浅舞駅を出発することがある

遅れる！

近況報告

御野場に引越してから
季節の波動が皮膚に沁みる

転居当時は

高圧電線の鉄塔が

威圧的な眼で見下ろし

新しい町には馴染めなかった

今では

危険を危惧する

憂いも消えた

遠くには

風力発電の羽根

メタリックの貌を覗かせる

飽きずに眺めた

あのころは

羽根が孤独を紡ぐ糸車にみえた

寂しさをかたどる

優しさがあつた

いくつもの季節が巡っても

過ぎ去らない景色がある

ケヤキ並木の道だ

師走の空の下

すっかり葉を落とした

並木の静けさが

わたしを受け入れてくれる

白い並木道を

若いわたしが散歩している

素朴な美しさに

弾んだ声がひびく

①

にわか

空が暗くなつた

途端に

大粒のあられが急降下

屋根に

道路に

ベランダに

怒つたように

白い礫^{つぎ}を打ちつける

動画を撮るため

戸を開けると

部屋の中にまで

飛び込んできた

冷たさを内包した

小さな球は

絨毯の上に散らばり

一休み

外は嵐のよう

バラバラバラバラ

ジャーシャーシャージャー

やがて

みぞれに変わり

雨に

今日は

立冬

②

今日から

ラジオ体操

息をいっぱい吸って

一・二・三・四

口から細く長く吐いて

五・六・七・八……

ポキポキ

骨の音

ハアゝ ファゝ

乱れる呼吸

お腹に手を当てて

あれ？

お腹がない！

垂れ下がってる……

アアゝ ファゝ

ため息交じりの

深呼吸

ラジオ体操

明日も頑張ろう！

【招待席】

ある季節に

前田 勉

遠くなつてしまった思いが

くすぶる日

追いつけないことに気付いた瞬間

の

情性が

わずかに

とどまることを忘れている

たたらを踏んだのは誰か

はこ
跛行の辛さを言い出せずにいるのは誰か

人びとは気付いたのだろう

痛みや物言えぬ苦しみに

だから

先人を真似

嚙んだ口を

少しだけ尖らせて

気付いているよ

と

遠い昔に見た

公園のオブジェのようにおどけて

ポーリングする

そうすること

人びとは季節の風に乗って

さまようことが出来るのだから

季節が傾きはじめたことに

いつも

突然に気付いて

人びとは

心をざわめかせているようだ

コトバ

が

こんなにも重いと驚いて

ためらい

ものを言えないまま

ざわめく心を手に取り

見つめたりする

生きながらえることを

望んでも望まなくても

すべては

どこか試されているのだとうそぶいては

神のせいにして

安心するのもかもしれない

たたらを踏めずにいたのは誰か

跛行の辛さを言い出したのは誰か

ある季節

が

うつろいはじめると

ものごとは

どこかで予測されていたはずなのに

気付くことを忘れたように装って

流れていく

風も

男をO脚にし

女をX脚にし

O_人X_こX_みO_のX_中・・・・

コラージュされた街並みの底を

ふらふらと流れていく

* 印から3行は自作「風 II」(1972年)より。

詩の人

komayumi 同人 若木 由紀夫

「ピットインダウン」発刊50号おめでとうございます。

矢代レイは、その名をまとうことで詩の人になった。小文では、亡き富岡多恵子の詩との訣れを参考に、矢代レイの「詩活動」を追ってみたい。

「追悼 富岡多恵子」(新潮2023・6月号)に、作家の黒川創が『ひとりで立つ覚悟』を寄せている。

(富岡は) 詩から離れるにあたり、「読者に伝わらない文章を書く、編集者から、これはダメだと注意を受ける世界で勝負したい」ということを述べた。

作者のひとりよがりが許容される詩の業界の甘

さと狭さに、もの足りなさを抱くようになっていた。

富岡多恵子は詩から離れたのではなく、詩を捨て小説・批評の場に転身した。「ひとりよがり」に甘んじている詩の業界に対する痛烈な批判を残して。

その潔さは、戦後逸早く短歌的抒情への批判を主導した小野十三郎——富岡の詩の師であった——を髣髴とさせる訣別であった。

(その後、富岡は詩作や表現行為について示唆に富む多くの評言を残している。)

ところで、詩の業界の「甘さと狭さ」とは何をさしているのだろうか。詩壇における「甘さ」とは必要な議論・批評の欠如とそれへの安住を、「狭さ」とは外部(社会・市井)に開かれた回路を持つとうとしない閉鎖的な詩壇、を指していると思われる。

残念ながら、秋田県の詩界においては鑑賞や解

釈はあるが、詩論や時代・状況と格闘する批評は皆無に等しい。詩を詩たらしめているのは他者と自己への批評（性）である。好き・嫌いが批評軸では困るのだ。

「世間のひとたちは、内部の詩人たちが思うほど『詩人』のことにも『詩』のことにも関心はなく頓着もしていない。」（富岡「ト書集」）ブランド詩人しか知らないし、出版業界も売らんかなで、スター詩人を無理につくろうとしている。私などには到底理解の及ばない詩が、詩壇では持て囃されている。

他方、自身を振り返ると、忸怩たる思いがある。富岡多恵子が対決した表現への情熱と「覚悟」が、悲しいかな、私にはないのだから。

矢代レイは、一人で詩誌を発行している。先ずはその持続する意志に感謝したい。県内ではかつてなかった試みであり、それが詩作する人たちへの刺激と励ましになっていることは確かだ。

「詩の勉強会」では参加者と詩表現を楽しみ、共に学び、朗読や展示発表など、詩作に止まらない活動は瞠目するほかない。

矢代レイの情熱と活動は、富岡多恵子が難じた「甘さと狭さ」をうち破る試みだ。大きな果実のなる日を祈りたい。

さて、私は矢代レイを「詩の人」と呼んだ。荒川洋治が「現代詩作家」と自称するのは、詩人と名乗ることに羞恥心があるからだろう。本当の詩人は自称しない。詩人とは他者の存在理由を脅かす書き手のことであり、己の生き様を曝してもなお、情熱と覚悟に生きる人のことだ。

矢代レイが詩の人から詩人になる日は、そこに来ているのかもしれない。私（たち）の存在理由を蹴飛ばして、春の土のように香しく匂い立つてほしい。

【ご案内】

第十六回「ピッタの会 現代詩勉強会」

左記の通り勉強会を開催いたします。内容は、

「参加者みんなで創る詩の教室」です。

ご参加をお待ちしております。

日時 四月五日（土）

時間 午後一時～三時半 参加費無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は三月二十八日（金）までに、

矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込み
ください。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

『ピッタインダウン』第50号を発刊した。創刊して丸九年と八ヶ月。歳月と詩の言葉をコツコツと積み上げ、今日に至る。

今号は記念号として、秋田県現代詩人協会会員のお二人をお招きした。お二人ともじつくり詩と対峙し、俯瞰の眼で詩世界を描き出す、尊敬する詩人である。

拙誌に快くご寄稿くださり、感謝に堪えない。

＊

秋田市御野場に移り住んで十一年と一ヶ月。ようやく環境にも慣れ、地に足がついた頃に、『ピッタインダウン』を創刊したことになる。

その間、詩の風景は変わった。多くの詩を書き、ともに生きてきた。詩のお蔭で自立した日々を送れている。

今年もよろしくお願い致します。

